

日本オーラル・ヒストリー学会第15回大会プログラム
Japan Oral History Association 15th Annual Conference

日程：2017年9月2日（土）・3日（日）

場所：近畿大学東大阪キャンパス

大会参加費

会員（一般・学生他ともに）：1,000円（2日通し）

非会員 一般：2,000円（1日参加1,000円）、

非会員 学生他：1,000円（1日参加500円）

懇親会のご案内

9月2日（土） 18:00～20:00

会場：近畿大学東大阪キャンパス【未定】*決まり次第ご連絡いたします

参加費：一般 4,000円、学生他 2,000円

学会員・非学会員のみなさま、一般・学生のみなさまともに、
ふるってご参加いただき、この機会に交流を深めていただきたく存じます。

《大会開催校より》

JOHA 第 15 回大会開催校理事 上田 貴子 (近畿大学)

このたび日本オーラル・ヒストリー学会大会を開催できますことは近畿大学文芸学部にとって大きな喜びです。

実施準備を通じて、関わったメンバーはオーラル・ヒストリーを改めて意識する機会を得ました。近畿大学には谷川健一氏、野本寛一氏の系譜をうけつぎフィールドワークを重視してきた民俗学研究所があり、本大会実施担当の文芸学部文化・歴史学科では独自の「文化資源学」を旗印に、聞き取り調査や地域の史資料収集を通じて、学生が地域社会にアプローチする活動を行ってきました。大会校企画はこれらの実践活動から発想を得ております。

このほかにも、大変興味深い企画と発表が用意されております。この 2 日間、皆様が充実した研究交流ができますよう務めてまいります。どうぞよろしく申し上げます。

開催校理事：上田貴子

学会事務局：佐々木てる、研究活動委員会委員長：蘭信三、会計：中村英代

*大会に関してご不明な点がございましたら、JOHA 事務局までお問い合わせください。

E-mail : [joha.secretariat\(at\)ml.rikkyo.ac.jp](mailto:joha.secretariat(at)ml.rikkyo.ac.jp)、Fax : 017-764-1570

◎ 自由報告者へのお願い

- 1) 自由報告は、報告 20 分・質疑応答 10 分 (合計 30 分) で構成されています。
- 2) 配布資料の形式は自由です。会場では印刷できませんので、各自 50 部ほど印刷し、ご持参ください。
- 3) 各会場にパソコンを準備しておりますので、ご利用の場合、USB メモリ等にプレゼンテーションのデータをお持ちください (ご自身の PC 等をご使用の場合、RGB ケーブル接続のみで USB などの接続方式には対応しておりません。必要な方は変換アダプター等もご準備ください。念のため資料を保存した USB メモリ等もご持参ください)。動作確認等は各分科会の開始前をお願いいたします。会場担当者にご相談ください。

◎ 参加者へのお知らせ

- 1) 会員・非会員ともに両日とも受付してください。参加にあたって事前申し込みは必要ありません。
- 2) 昼食は近畿大学周辺の食堂等をご利用いただくなど、各自でご用意ください。なお、夏期休暇中につき、学内の店舗は休業しております。近隣のコンビニまでは 10 分程度かかります。
- 3) なおロッカーおよびクロークはございません。荷物は各自で管理をお願いします。

◎ 大会会場 校内マップ



1. 大会プログラム

第1日目 9月2日(土)

12:00 受付開始

13:00～15:00 自由報告(A館101教室)

【第一分科会】 (司会：石川良子・佐藤量)

- 1-1 アメリカの歴史的変遷におけるある「日系アメリカ人女性」の経験ーハワイ・日本・アメリカの移動経験から
松平けあき (上智大学)
- 1-2 炭鉱の閉山をめぐるもう一つのリアリティーー元炭鉱職員のライフヒストリーから
坂田勝彦 (東日本国際大学)
- 1-3 「聴く」から「伝わる」への転換ーある南洋帰還者とのやり取りの軌跡から
三田 牧 (神戸学院大学)
- 1-4 戦後ブラジル移住についてー奄美大島出身の二人のコチア青年移民のライフヒストリーから
加藤里織 (神奈川大学)

【第二分科会】 自由報告 (司会：好井裕明・広谷鏡子) (A館102教室)

- 2-1 日本におけるACT UPー性感染HIV陽性者当事者と協力者はいかに協働して生存とパンデミックに対応してきたか
大島 岳 (一橋大学)
- 2-2 聞き書き調査で読み解いた米国大統領選ー1964年のTVCM“Daisy”を事例として
片山 淳 (東京経済大学)
- 2-3 テレビの社会派ドキュメンタリーはいかに制作されたか？ー伊東英朗氏が手がけたシリーズ『X年後』(南海放送)を事例に
西村秀樹 (近畿大学)・小黒 純 (同志社大学)
- 2-4 戦時性暴力被害者証言の信頼性・重要性と、検証の方法論
井上愛美 (韓国 国民大学)

15:30～17:30 研究交流実践会 (大会開催校企画) (A館102教室)

世代をつなぐ聞き取り～オーラル・ヒストリーの可能性～

趣旨：

ライフストーリー研究の手法で研究を進める高山真氏。聞き書きを残しておくことそしてそれを使って歴史叙述を行おうとする森亜紀子氏。失われつつある生活を聞き取っておこうとする藤井弘章氏。それぞれ社会学、歴史学、民俗学の現場で聞き取り調査を行ってきた3人の研究者から聞き取り調査の現場で感じてきたことを語ってもらう。特に、今回は「世代」をキーワードにとりあげた。世代を意識することで、苦労したこと、新たな気づきなどを参加者と意見交換し、聞き取り経験を豊かにしていく方法について考えていきたい。

司会：上田貴子（近畿大学）

第一報告 ライフストーリー・インタビューの経験を作品化する

高山真（慶応義塾大学）

第二報告 ひとびとのなかに「歴史」を見る－沖縄に暮らす南洋群島引揚者への調査から－

森亜紀子（同志社大学）

第三報告 民俗学の聞き取り調査－民俗文化の記憶・体験を残すところみ－

藤井弘章（近畿大学）

18:00～20:00 懇親会

第2日目 9月3日（日）

9:00 受付開始

9:30～12:00 自由報告(A館101教室)

【第三分科会】（司会：塚田守・滝田祥子）

3-1 生き抜くための「多文化共生」－当事者支援者の経験から

伊吹 唯（上智大学）

3-2 ライフストーリーにおける学校経験の位置－公立男女別学校出身者への調査から

徳安慧一（一橋大学）

3-3 はんなり世界の生活－京都北野上七軒花街の衣食住に関する聞き取りを中心に

中原逸郎（京都楓錦会）

3-4 農家を継ぐ女性たち－農家民宿経営をめぐる多世代ライフストーリー

梶本歩美（国際教養大学）

【第四分科会】 テーマセッション(A館102教室)

再び〈戦争の子ども〉を考える

趣旨：

本セッションの目的は、甲南大学人間科学研究所が実施した〈戦争の子ども〉プロジェクト（第Ⅰ期2007～2008年、第Ⅱ期2009年、第Ⅲ期2010～2011年）をふりかえり、成果と課題を共有するとともに、今後の研究の展開にむけて議論を深めることにある。ドイツ語の Kriegskind の翻訳である〈戦争の子ども〉は、ドイツ語としても新しく、ナチスが政権を掌握して以降、第二次世界大戦中集結までに子ども時代を過ごした（あるいはその期間中に生まれた）世代を指す言葉として、精神分析家のミヒャエル・エルマンが2003年にはじめて用いた造語である。エルマンを中心とするミュンヘンの「戦争の子ども時代プロジェクト」は、〈戦争の子ども〉の体験とそれがその後の人生に与えた影響を心理療法の観点から検証するなかで、他の世代よりも高くあらわれる〈戦争の子ども〉の人格障害と戦争体験の密接な関連を明らかにしてきた。

甲南大学の〈戦争の子ども〉プロジェクトは、ドイツの研究との比較をめざしてはじまった。一定

の方法によって戦争体験を記録すること、記録された体験からそれらを理解するための理論を構築することがその課題とされた。そうした経緯から甲南大学の〈戦争の子ども〉プロジェクトは、当初はドイツの調査と同様の調査・分析の方法を翻訳によってそのまま採用したが、しだいに方法や視角にアレンジをくわえ独自の特徴をもつようになった。そのひとつが、心理学的アプローチと歴史学的アプローチの対比と相補性への言及であり、そのことがオーラル・ヒストリー研究の方法や特質にたいする問題提起をふくむこととなった。

プロジェクトの終了から5年半を経てふたたび議論の遡上にあげようとするのは、2016年度からはじまった「歴史研究にとってのオーラル・ヒストリー」というJOHA研究活動共通テーマについて、聞き取った戦争体験を歴史化し、その意味を多角的にとらえようとした心理学と歴史学の協働の実践から新たな知見を得ることができないかと考えたからである。

以上から、本セッションではまず、〈戦争の子ども〉プロジェクトを主導した森茂起が、本プロジェクトの成果をふまえて近年の研究成果を報告する。つぎに、歴史研究者の立場で同プロジェクトにかかわった人見佐知子はその経験を読み解く。くわえて、歴史学と社会学の専門家にそれぞれの立場で〈戦争の子ども〉プロジェクトを検証してもらい、可能性と課題を整理することをつうじて論点提示をおこなうこととしたい。

司会・趣旨説明 人見佐知子（岐阜大学）

第一報告 戦争体験の聞き取りにおけるトラウマ記憶の扱い——歴史学と心理学の協働の試み

森茂起（心理学・甲南大学）

第二報告 〈戦争の子ども〉からオーラル・ヒストリーを考える

人見佐知子（歴史学・岐阜大学）

コメント1 倉敷伸子（歴史学・四国学院大学）

コメント2 中村英代（社会学・日本大学）

12:05~13:00

総会（A館102教室）

13:30~16:30 シンポジウム（BLOSSOM CAFÉ 3F 多目的ホール）

戦争経験の継承とオーラルヒストリー——「体験の非共有性」はいかに乗り越えられるか

趣旨：

本シンポジウムは、戦争経験の体験者や非体験者である平和ガイドなどによるその体験の継承の可能性と意味について論じる。このテーマは桜井厚ほか『過去を忘れない 語り継ぐ経験の社会学』（2008）などに代表されるように、JOHAにおいては繰り返し論じられてきた中心テーマのひとつだが、今回それを再び取り上げる意義は以下の3点にある。

(1)戦後70年が経って戦争体験者、被爆者、アウシュビツ収容所のサバイバーが亡くなりつつあり、社会の世代交代が進むなかで、戦争にかかわる歴史経験の継承はどのようになされうるのか緊急な研究課題となっている。(2)そのような問題意識は同時に社会全般で広く共有されている課題でもある。この課題に長くかかわってきた本学会においてこの社会的課題を共有し、社会に広く発信することは学会の社会的役割だと思われる。

この社会問題化は、体験者の退出・不在だけでなく／そのことも相まって、(3)歴史認識において新自由主義が影響力を増し、しかも領土問題や領土ナショナリズムが強まり、その状況下で日本社会（いや世界）の戦争観が静かに変化していることと密接に関係している。つまり、現在は「戦後」の幾つ目かの〈歴史認識の節目〉にあると思われる。

このようななか、当事者から直接聞き取ることが難しくなりつつある今こそ、戦争経験の継承とオーラルヒストリーの真骨頂が問われている。そこで、戦争体験の聞き取りや継承に卓越した研究実績のあるお三方に、現状の変化を意識しつつ、ご自分の研究実践を手がかりにしてこの課題の今日の問題性に立ち向かってもらう。なお、本シンポジウムは公開シンポジウムである。学会のみでなく広く市民の参加をえて議論を深めたい。

司会 蘭 信三（上智大学）

第一報告 「戦友会」の質的変容と世代交代―戦場体験の継承をめぐる葛藤と可能性

遠藤美幸（神田外国語大学）

第二報告 非被爆者にとっての〈原爆という経験〉―高校生が描く原爆の絵の取り組みから

小倉康嗣（立教大学）

第三報告 アウシュヴィッツにてホロコーストの生存者に会うということ

田中雅一（京都大学）

コメンテータ 今野日出晴（岩手大学）

2. 自由報告要旨

【第一分科会】

1-1 アメリカの歴史の変遷におけるある「日系アメリカ人女性」の経験―ハワイ・日本・アメリカの移動経験から

松平けあき（上智大学）

本報告ではハワイ日系二世のある女性のライフヒストリーから、アメリカのマクロな歴史の変遷（第二次大戦、公民権運動等）の中でミクロな個人がいかにかに「人種」、ナショナリティ、ジェンダーに係る経験をし、主体的行動に転換させてきたかを論じる。T 夫人はハワイに生まれ、戦時下に「日本的なもの」への否定により仏教からキリスト教に改宗する。その後夫の軍務で日本に居住し、白人兵に服従する日本人女性と出会う。子供と養子を育て1960年代には、ソーシャルワーカーになった夫とシカゴに居住し公民権運動に参加した。ダイナミックな歴史の変遷の中複数の社会を移動した経験から、彼女が「日系」「アメリカ市民」「女性」であることの意識を構築、再構築していくプロセスを明らかにする。

1-2 炭鉱の閉山をめぐるもう一つのリアリティー―元炭鉱職員のライフヒストリーから

坂田勝彦（東日本大学）

本報告は、杵島炭鉱（佐賀県杵島郡）の元職員のライフヒストリーをもとに、彼らが炭鉱閉山という出来事をいかに経験し、その後の人生をどのように歩んできたかを検討する。

炭鉱労働者というと、イメージされるのは多くの場合、地下労働を担った鉱員たちだろう。だが、職員たちも炭鉱という世界を構成する重要なアクターであり、鉱員たちと同じように、彼らも炭鉱の

閉山後、従前と大きく異なる人生を歩んできた。

炭鉱閉山後の経験について、鉱害復旧事業に携わった元職員は炭鉱の「後始末」と表現した。また、同僚と起業した元職員は炭鉱の閉山という出来事を「終戦」と振り返る。彼らの言葉からは、炭鉱の閉山を巡って、裸一貫で第二の人生を模索した多くの鉱員たちと異なる意味合いが浮き彫りになる。

1-3 「聴く」から「伝わる」への転換：ある南洋帰還者とのやり取りの軌跡から

三田 牧（神戸学院大学）

他者の人生の語りに耳を傾ける時、語り手が伝えようとしていることが調査者に伝わる保証はない。語りは「情報」としては理解されても、話者にとって語りがある「意味」を聞き手がつかむことは難しい。

本発表では、南洋群島での経験を語ってくれたある人と私との数年にわたるやりとりの軌跡を分析する。壊れたレコードのように幾度も繰り返される同じ出来事の語りを通し、私は彼女の過去をセピア色の情景として聴いていた。そのような「聴きのモード」が崩れたのが、彼女と最後に会った時だった。その時、何が起り、何がどのように変わったのか。

本発表では他者の語りを「聴く」ことが、語りの意味が「伝わる」ことにつながった時、どんな可能性が拓けるかについて考察する。

【第二分科会】

2-1 日本における ACT UP－性感染 HIV 陽性者当事者と協力者はいかに協働して生存とパンデミックに対応してきたか

大島 岳（一橋大学）

日本におけるエイズの歴史理解の枠組みは、1989年の薬害エイズ訴訟から96年和解による勝訴とそれを巻き巻く社会運動が中心であり大きな社会的インパクトを有している。しかしその成功の予期せぬ効果は、薬害という「良い」エイズと、日本の HIV の大部分を占める性感染を「悪い」エイズ（鮎川 2000:125）とする二項対立的な理解に伴う分断と非対称性が生じたことにある。本報告では、薬害訴訟というエイズの歴史のマスターナラティブに加えて、オーラル・ヒストリーの手法を用いて性感染当事者とその協力者がいかに自らの生存や生活の質を高めるため、そしてパンデミックを防ぐ目的のために協働してきたかを報告する。その特徴は合衆国の ACT UP などパフォーマンスを最大限に活用したのとは異なり、日本ではプラグマティックな戦術と実践を重視したことにある。そのため当事者の果たした役割の大きさは見えにくく既存の歴史から見落とされがちであったものの、そこで見えてくる歴史の諸相は、一つの「われら勝ち得し世界」（Weeks 2007=2015）である。

2-2 聞き書き調査で読み解いた米国大統領選－1964年の TVCM“Daisy”を事例として

片山 淳（東京経済大学）

米国の大統領選ではネガティブ CM の応酬も珍しくはないが、その歴史的な先駆けと言えるのが1964年に大きな反響を巻き起こした民主党の“Daisy”であろう。本発表は筆者が2000年に制作者の故トニー・シュワルツ（Tony Schwartz）氏に実施したインタビューを事例に、当事者への聞き書き調査を通じてキャンペーンの舞台裏についての情報を得るだけでなく、米国の選挙キャンペーンにおけるコミュニケーションの在り方の再検証も意図している。また報告は、こういった検証におけるオーラル・ヒストリー研究の意義についても考察するものである。

2-3 テレビの社会派ドキュメンタリーはいかに制作されたか？—伊東英朗氏が手がけたシリーズ『X年後』（南海放送）を事例に

西村秀樹（近畿大学） 小黒 純（同志社大学）

1953年日本でテレビ放送が始まってまもなく、NHKの番組『日本の素顔』が水俣病をテーマにした『奇病のかげに』（1959年）を放送し、テレビドキュメンタリーの制作が本格化した。以来いわゆる「社会派ドキュメンタリー」は放送ジャーナリズムの一翼を担ってきた。近年の代表例として、南海放送が放送した『放射線を浴びたX年後』を事例に、ドキュメンタリーの制作過程を調査した。この作品は、米政府による南太平洋での水爆実験により、周辺海域で操業中だった第五福竜丸などのマグロ漁船が被爆し、乗組員たちがガンなどで次々に死亡する事実迫っている。社会的な評価は高く、数々の賞を受けた。どのように作品が制作され、番組が放送されるに至ったのか。制作に格闘した伊東英朗さんから聞き取りを進め、オーラル・ヒストリー化を試み、作品の成立過程を探求する。

2-4 戦時性暴力被害者証言の信頼性・重要性と、検証の方法論

井上愛美（韓国 国民大学）

河野談話が認めた強制性を否定する人々は、それを示す証拠がないと言う。けれども河野談話に当たっては、強制性を示す文書史料は見つからなかったが、被害者の証言を証拠としたのだ。つまり、彼らは被害者の証言を証拠として認めていないということである。彼らはオーラル・ヒストリーの信頼性を無条件に否定している。オーラル・ヒストリーの信頼性を疑うとき、よく矛盾点が指摘される。戦時性暴力被害者証言の場合、証言に矛盾が生じる要因と、証言の重要性を知るには、証言されているのが暴力の記憶であることに注目する必要がある。また、「慰安婦」被害者証言の信頼性を確かめるために関係者が用いてきた方法は、他の種類のオーラル・ヒストリーにも役立つだろう。しかしながら、証言の検証が被害者に対するさらなる暴力になり兼ねない点には、留意が必要だ。

【第三分科会】

3-1 生き抜くための「多文化共生」—当事者支援者の経験から

伊吹 唯（上智大学）

本報告では、中国帰国者二世のライフストーリーから多文化共生支援を考察する。彼女が中国での苦労、日本への移動経験、日本での生活などを通して身に付けた「生活戦略」は、彼女自身が行う他の帰国者や中国人に対する多文化支援の方針の基礎にある。このような国境を越えた移動を経験した「当事者」による支援は、移民コミュニティのなかで伝統的に行われてきた相互扶助でもあり、地方自治体による多文化共生政策のなかにも組み込まれている。にもかかわらず、これまでの多文化共生研究ではその視点は後景化され、多文化共生規範による支援の評価が多く行われてきた。本報告では、当事者支援者の経験から、規範的な議論にとらわれずに現場における支援の意義を明らかにする。

3—2 ライフヒストリーにおける学校経験の位置：公立男女別学校出身者への調査から

徳安慧一（一橋大学）

本報告は、個人のライフヒストリーにおける学校経験への意味づけに着目し、人生の軌跡を振り返るにあたって、特に（後期）中等教育期間、すなわち高校にまつわる経験がどのように遡及的に解釈さ

れ、位置づけられるのかについて分析する。対象としては、公立男女別学校同窓会役員へのインタビュー調査から、進路選択を通じて自らのライフコースに与えた影響や学校に対する評価の語りを検討する。また、共学化への反対運動、受験実績や偏差値による学校の序列化といった出身校の現状に対する語りも取り上げる。これらの語りの分析を通じて、本報告では、在学期間を時間的・空間的に超えて再構成された学校経験が、個人の生とどのように関係しているのかについて考察する。

3—3 はんなり世界の生活—京都北野上七軒花街の衣食住に関する聞き取りを中心に—

中原逸郎（京都楓錦会）

花街は舞妓や芸妓が芸（芸能と同義）を披露し、地元の花街言葉による会話によって顧客を応接する場である。その芸の担い手の居住地で、かつ、芸の披露の場である花街の生活空間の把握は、芸の継承に関わる課題の発見上重要である。

花街の環境の変化については居住空間に関する学術研究も確認されるが、衣食住を含めた生活者の視点に立った花街の調査・研究は十分な蓄積があると言えない。

花街は出所（出自）のわかる顧客中心に形成された排他的地域であるが、生活実態の把握が芸の継承上も重要だと思われる。そのため、戦後新作舞踊を発表してきた北野上七軒（かみしちけん）（京都市上京区）を調査地を選び、生活データの収集を試みた。

3—4 農家を継ぐ女性たち—農家民宿経営をめぐる多世代ライフストーリー—

梶本歩美（国際教養大学）

本報告は、秋田県仙北市で農家民宿を営む女性とその家族のライフストーリーを通して、女性がどのように農家としての生き方を模索し、切り拓いているのかを考察するものである。農家民宿とは農家が自宅を利用して、県内外の来客者に農業や食文化などの農村体験を提供するものであり、伝統的な日本の家族農業のあり方を変える取り組みともいえる。農家民宿による新たな経済活動や人的交流が、農家としての生き方にどのような変化を生み出しているのか。報告者は、農家民宿を経営する30代と40代の農村女性およびその親と祖母を対象にライフストーリーの聞き取りを行った。女性たちは、親や祖父母世代から農家としての生き方の何を継承し、何を切断しながら、自身の農家としての生き方を模索しているのかを考察する。